



上  
昌広  
NPO 法人医療ガバナンス研究所  
理事長



かみ・まさひろ。1968年兵庫県生まれ。東京大学医学部卒業、93年東京大学医学部附属病院内科研修医、95年都立駒込病院血液内科医員、99年東京大学大学院医学系研究科修了。虎の門病院血液内科医員、国立がんセンター中央病院薬物療法医員などを経て10年7月より東大医科学研究所特任教授。16年4月から現職。

## 『東日本大震災 震災市長の手記』

立谷秀清福島県相馬市長が『東日本大震災 震災市長の手記—平成23年3月11日14時46分発生』（近代消防社）という本を出版した。

立谷氏は医師だ。1977年に福島医大を卒業後、83年には立谷内科医院を開業した。後に相馬中央病院（一般49床、療養型48床）へと発展する。立谷氏の政治活動は95年に福島県議に当選したことに始まる。2002年1月には相馬市長に当選し、現在4期目だ。

私が、立谷氏と知り合ったのは、震災直後に仙谷由人衆院議員（当時）に紹介されたのがきっかけだ。仙谷氏からは「相馬市の市長が助けを求めている。私が知る中で、もっとも能力が高い市長の1人だ」といわれた。立谷氏の携帯に電話して、少し話をしたら、仙谷氏の評価が正しいことがすぐに分かった。指示、依頼が具体的で的確だからだ。

後日、相馬市役所の職員から、「震災後の市長のリーダーシップはすさまじかった」と聞いた。震災当日の夜には「棺桶を確保すること」「仮設住宅のための土地、双葉郡からの避難者を受け入れる住居を確保すること」を指示したそうだ。災害時の通常業務に加え、先を見据えた対策を立てていたことになる。

このことが後日効いてくる。海と山にはさまれた浜通りは狭く、空き地が少ないからだ。相馬市が多くの支援者を受け入れ、仮設・復興住宅を速やかに建設できたのは、立谷市長の英断に負うところが大きい。

立谷市長は「この街を復興させたいと思えば、歯を食いしばっても前向きな発言をしなければならない」という。被害を強調し、政府に援助を求めれば、部外者は同情してくれるだろうが、当事者は「そんなにひどいなら、私もここから出て行こう」と思うだけだ。思惑と反対の結果を招く。立谷氏は、地

域住民の視点に立ち、多くの事業を主導した。内部被曝検査、土壌汚染検査、住民健診などだ。一連の事業は住民を安心させた。また、このような事業に参画した早野龍五東大名誉教授（原子力物理）、渋谷健司東大教授（国際保健）は、日本を代表する研究者へとプレゼンスを高めた。当研究室の関係者である坪倉正治医師、森田知宏医師、山本佳奈医師などは現地に移り住み、多くの実績を挙げた。彼らの活躍を見て、たくさんの若手医師や研究者が相馬地方に入っている。

立谷市長のイメージは、素朴で実直という東北人のイメージとはかけ離れている。私は大阪の商売人に近いものを感じる。なぜ、相馬の地に、このような人材が生まれたのだろうか。立谷氏は、福島県浜通りと宮城県南部に多い。ルーツは相馬郡立谷村（現相馬市）だ。そして、その祖は、1323年桓武平氏の流れを汲む相馬氏とともに、千葉県から相馬地方に移り住んだ。

立谷家をルーツとする人々の集まりを紹介する「立谷ファミリー」のホームページによると、「江戸時代、立谷家のご先祖様は、廻船問屋を営んでいました。立谷するが分業して、『材木』『米』『雑貨』『海産物』およびその他の物資を江戸時代初期から、立谷一族が結束して商いをしていました」という。立谷市長の実家は、相馬市原釜地区で醸造業を営んでおり、典型的な「立谷ファミリー」だ。立谷市長は、このような伝統の中で育った。廻船問屋は物資とともに情報が流通する。上意下達では生き残れず、現状に即して、臨機応変に判断せざるを得ない。まさに、震災後の立谷市長の行動と被ってくる。

この本は、東日本大震災・原発事故から故郷を守った当事者による戦いの記録だ。地域医療を考える参考になる。1人でも多くの人に、ぜひお読みいただきたい。